

# 豊かな人間性を培う家庭教育の推進

## — 一家庭で子どもと親が過ごす豊かな時間 —

天理市立丹波市小学校 教諭 西 辻 雅 代

Nishitsuji masayo

### 要 旨

核家族化とともに親や子どもたちの多忙化が進む中で、家族とのつながりや家庭内での居場所を失いつつある子どもたちが少なくないという現状がある。全国学力・学習状況調査の結果からは、それらの影響が学習意欲の低下やストレスという形で表れてきている。本研究では、同じ傾向がみられる学級の子どもと親へのアンケート調査による実態を基に、授業実践を通して学校と家庭との連携の在り方について考察する。

キーワード： 経験の共有、肯定的な声かけ、自己肯定感

### 1 はじめに

小学校2年生の子どもたちは、まだまだ大人の手助けが必要であったり、親に甘えたい年齢であったりする。しかし、親の方は、小学校に入学して1年経過したこともあり、子どもから徐々に手を離していく時期である。

本学級でも、自分の話を聞いてもらいたくて我先に担任に話しかけてくる子どももいる。その反面、「分からない」が言えなくてすねてしまったり、泣いてしまったりする子どももいる。自分の物の管理ができず忘れ物をしたり、落し物をしたりすることを繰り返す子ども、落ち着きがなく学習作業が雑になる子ども等、様々な子どもの気になる姿が見られる。

幼児期、学童期の子どもにとって、親は環境そのものであり、そのかかわり方が子どもの成長に大きな影響を与えている。親から愛され、大事にされたという安心感が信頼感となって子どもの自己肯定感をつくり、幼児期のしつけや学童期の学習意欲の基盤となっている。

親子で過ごす豊かな時間とは、子どもの気持ちを汲んで大人がかかわり、子ども自身が受け入れてもらったという満足感と、スキンシップや肯定的な言葉かけにより愛されているという安心感を与えられる時間ではないだろうか。その自己肯定感をはぐくむことこそ明日への意欲やエネルギーとなっていくと考えられる。そのため、小学校、特に、低学年の時期の子どもにとって親とのかかわり方が大変重要であり、学校の取組が家庭に受け入れられるような連携が必要となってくる。

そこで、学級の子どもたちの親子関係の中で、どのような実態がみられるかをアンケート調査を通してその課題を探り、授業実践を通じた豊かな時間をはぐくむ学校と家庭の連携の在り方について考察する。

## 2 研究目的

アンケート調査によって親子関係の実態と課題をつかむことにより、良好な親子関係とは何か、授業実践をから考察する。また、親子が心身共に安定して過ごす豊かな時間をはぐくむ学校と家庭の連携の在り方について考察する。

## 3 研究方法

### (1) 親子アンケート調査を行い、親子関係の実態と課題をつかむ

ア アンケート調査の実施方法

イ アンケート調査の結果より

ウ アンケート調査の考察

### (2) 家庭との連携の在り方を授業実践を通して探る

ア 親子音読

イ 絵本『しゅくだい』の読み聞かせから「だっこ」の宿題

ウ 生活科「おいしいおにぎりを作ろう」

## 4 研究内容

### (1) 親子アンケート調査による親子関係の実態と課題の把握

2年生の子どもたちは、ふだん、教室では元気で明るい子どもたちである。授業中もよく発表し、活発に過ごしている。しかし、精神面で弱い部分をもっていたり、生活習慣が乱れたりしている子どもたちもいる。この原因としては、父親や母親の就労事情や、下の弟や妹に手が掛かることなどで、子どもとなかなかじっくりと向き合う状況をつくれていないのが現状であるように思われる。子どもたちの背景には家庭での親の姿がある。この子どもたちをより理解するために、親子のアンケート調査を行い、家庭での生活実態を把握することにした。

#### ア アンケート調査の実施方法

アンケート調査の実施方法については表1のとおりである。

表1 実施状況

	実施人数	実施時期	実施方法
児 童	28名	7月中旬	記名選択式
保 護 者	27名（1名未提出）	7月下旬（個人懇談時）	無記名選択式

家庭において親と一緒にどのようなことをしているのか、表2の生活アンケートで調査した。このアンケート調査は、一人一人のふだんの様子とアンケート結果を比較するために、記名式で行った。保護者についても個人懇談で趣旨を説明し、その場でアンケートを実施した。親と子どもの意識の違いを知るために、表2の「1」の項目と全く同じものを親のアンケートでも実施し、共通項とした。（以下、この「1」の11個の項目のことを「ふれあい項目」ということにする。）

また、子どもについては、平日と休日の翌日の2日間実施し、その違いを調べた。アンケ

一調査の内容には、「ふだん自分の行動に自信をもっているか」、「今の自分が好きか」など、自己肯定感にかかわる質問を行った。そのことによって、ふれあい項目数と自己肯定感の関係を調べた。

表2 生活アンケート（児童）一部省略

**いえでの生かつアンケート**

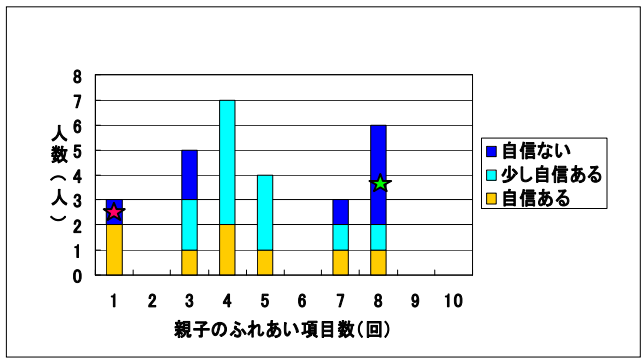
2年組  男子・女子  
(月 日)

あなたがいえでいっしょにすんでいる人すべてを○でかこんでください。

おじいさん	おばあさん	お父さん	お母さん	お兄さん	お姉さん	弟	妹	その他( )
-------	-------	------	------	------	------	---	---	--------

先生のせつめいをよく聞いて、まずはれんしゅうしてみましょう。

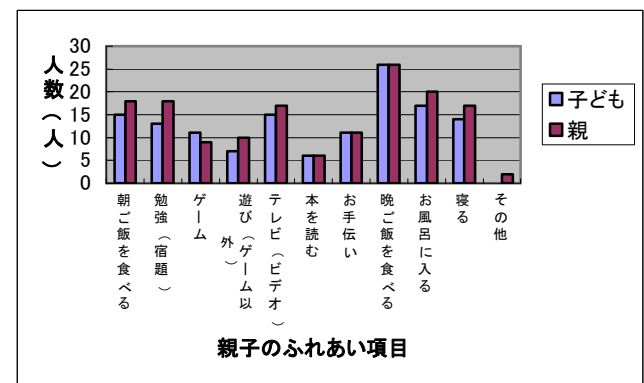
れんしゅう	学校は楽しいですか。	1 <input type="checkbox"/> 楽しい
		2 <input type="checkbox"/> ふつう
		3 <input type="checkbox"/> あまり楽しくない
		4 <input type="checkbox"/> とても楽しくない
		5 <input type="checkbox"/> その他( )
れんしゅう	学校から帰って寝るまでのあいだに、よくすることを2つまで答えましょう。	1 <input type="checkbox"/> スポーツ・外遊び
		2 <input type="checkbox"/> テレビ・テレビゲーム
		3 <input type="checkbox"/> 読書・家での子音
		4 <input type="checkbox"/> 絵・習い事
		5 <input type="checkbox"/> その他( )



グラフ1 親子のふれあい項目数と自信の関係

あなたのいえでの生かつについて教えてください。

1	ふだん、おうちの大人の入といっしょによくすること、ぜんぶに○をつけましょう。	1 <input type="checkbox"/> あそび・ほんをたべる
		2 <input type="checkbox"/> ベンまよ(ゆくだい)
		3 <input type="checkbox"/> ゲーム
		4 <input type="checkbox"/> あそび(ゲーム以外)
		5 <input type="checkbox"/> テレビ(ビデオ)を見る
		6 <input type="checkbox"/> 本(マンガ)が(い)を(読む)
		7 <input type="checkbox"/> お手伝い
		8 <input type="checkbox"/> ほんご(ほん)をたべる
		9 <input type="checkbox"/> お風呂に入る
		10 <input type="checkbox"/> ねる
		11 <input type="checkbox"/> その他( )
2	上の問いで4のあそびとこたえた人に聞きます。それはどのようなあそびですか。	
3	学校であつたようなことを、おうちのの人に話しますか。あてはまるものに○をつけましょう。	1 <input type="checkbox"/> 友だちのこと
		2 <input type="checkbox"/> 先生のこと
		3 <input type="checkbox"/> じゆぎょうのこと
		4 <input type="checkbox"/> しゅくだいのこと
		5 <input type="checkbox"/> あまり話をしない
4	おうちの人のいっしょにやってみたいことを書きましょう。	



グラフ2 親と子どものふれあい項目の認識の差

イ アンケート調査の結果より

ふれあい項目として、「朝ご飯」、「勉強」、「ゲーム」、「遊び(ゲーム以外)」、「テレビ」、「読書」、「お手伝い」、「晩ご飯」、「入浴」、「寝る」があるが、当初、これらの中で親子で一緒に過ごす項目数が多いほど、子どもの自己肯定感が高いと予想していた。しかし、結果は親子で一緒に過ごした項目数の多少にかかわらず、「自分のすることに自信がない」と答えた子どもがいることが分かった。(グラフ1)

ふれあい項目数が1回で「自分のすることに自信がない」と回答したA(グラフ1中の赤い星の場所に位置する)は忘れ物や落し物が多く、物の管理が十分できない。友だちにちょっとしたかきを出したり、嫌なことを言ったりしてけんかになることも多い。母、姉、本人の三人家族で自営業のため、母親は忙しく、ふだんは姉弟だけのことが多いようである。アンケート調査でも、項目1の問いに対して「お手伝い」だけの回答であった。

一方、ふれあい項目数が8回と多いにもかかわらず、「自分のすることに自信がない」と回答したB(グラフ1中の緑の星に位置する)は学校では失敗や困ったことがあるとすねてしまうことが多い。友だちとのトラブルも多い。家庭では小さい弟妹がいるため母親の手がかかってしまう傾向にあり、兄であるBには厳しい声かけをされることが多い。

C(上に同じ緑の星)も同様に親子で一緒に過ごしている回数が多いにもかかわらず、「自分のすることに自信がない」と回答し、学校の授業においても自信のなさから文章や絵での

表現をうまくできないことが多い。Cの母親は常にCが会話や行動について、気になるため先に口出しをしてしまいがちになり、Cが自らすることを妨げてしまうことが多い。

このことから、親子のふれあい項目数が多くても、必ずしも子どもの自己肯定感を高めているという訳ではないことが分かってきた。

また、質問1の子どもと親の回答を比較したものがグラフ2である。11個のふれあい項目のうち、親と一緒にしていると思っけていても、子どもと一緒にしてもらっているとは必ずしも思っけていないという結果が得られた。

このことから、単に親子と一緒に行動するだけでは子どもたちの自己肯定感を高めることにはつながらず、親側の自己満足に終わっているということが考えられる。子どもたちが納得できる時間とは、親と向き合い、自分をしっかり見つめてもらえることだと分かってきた。

また、質問4の「おうちの人と一緒にやってみたいこと」については、子どもたちの希望は「旅行」のような特別なことではなく、「お母さんといっしょに寝たい」とか「パパと一緒に晩ごはんを食べたい」などが挙がっていた。子どもたちは、特別なことを望んでいるのではなく、毎日の生活の中で、親子で肌と肌を合わせたり、顔を合わせて過ごすことを望んでいることが分かる。

## ウ アンケート調査の考察

以上のことから、親と子どものかかわりは、一緒に過ごした時間の長さや頻度ではなく、子どもが親とのふれあいや会話をすることによって満足感を得るということが重要で、「ふれあいの質」の問題であることが分かった。親子ふれあいの「質」を高めるためには、お互いに向き合い、子どもに寄り添った時間を過ごすことができる場を設けることが必要である。

## (2) 授業実践を通じた家庭との連携

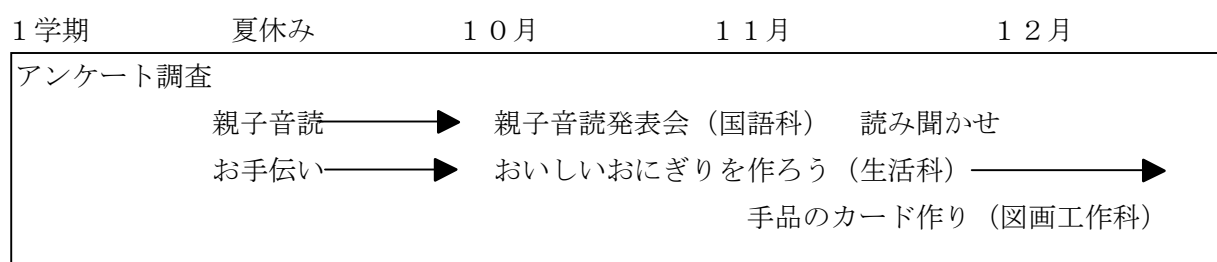
アンケート調査の結果から、

- ・ 親が会話の中に、肯定的な言葉がけを多くできるように心がける
- ・ 親子と一緒に過ごしていることを体で感じる

ということを親が実感して取り組めるように、授業等を通して実践した。

1年間の取組の流れは以下のとおりである。

表3 実践の流れ



## ア 親子音読

親子音読は、親子で役割分担をしながら、かけ合いで詩を読むものである。ふだんの学習でも、国語の教材文を音読し、家の人に聞いてもらう宿題はあるが、家庭の状況によっては、音読の宿題を学童保育の指導員さんに聞いてもらったり、家庭でも親が家事をしたり、他の兄弟の宿題を見たりしながら、片手間に聞いてもらったりしている子どもが多い。そのため、少しの時間でも子どもと向き合ってもらえる時間をとればよい、との思いから夏休みの宿

題とし、その活動内容を次のように設定した。

- ・ 親子で一緒に声を出す経験をする
- ・ 表現の工夫などを話し合う機会をもつ
- ・ 日本語の響きやリズムを味わい、二人で楽しく音読する

この活動内容は、個人懇談や学級通信などで親に説明をし、理解を求めた。夏休みの宿題について、親子の感想は表4に示したとおりである。

**表4 感想**

- 子どもは、ふだん音読が嫌いでしたが、親子で音読するのを自分から進んで一緒にしようと言ってくるようになって楽しくできてよかったです。(母親)
- とても楽しかったです。子どもとのふれあいをありがとうございます。(父親)
- おいかけっこをしているみたいで、心と心が寄り添ううれしさを味わうことができました。(母親)
- 「なまけにんじゃ」を読んでもとすごく楽しかったです。ママありがとう。(子ども)
- ママと読めたのが楽しかったけど、むずかしいところもあった。(子ども)

子どもたちは、感想にもあるように、親と一緒にすることで、音読する楽しさがより深まり、意欲的に取り組めたことが分かる。また、親の方も、最初は単に「宿題」の相手をしていただけだったが、続けて音読をするうちに、「心と心が寄り添ううれしさ」を味わい、楽しさを感じるようになったことが分かる。

「ぼくのお母さんの忍者の声、上手やで。」と言うA（アンケート調査でふれあい項目数が1回で自信のなかった子ども）の発案で親子音読発表会を開催することとなり、保護者に呼びかけた。10月の休日参観と11月の平日の2回、行った。Aは、ふだんは忙しくしている母親が自分の発表会のために学校へ来てくれたこと、二人で発表をやりきったことをとても喜んでいて、この取組を進めたことで、担任自身もAの理解を深めることができ、Aとの関係も良好になってきた。さらに、この頃からAの授業に参加する態度に変化が見られるようになった。

また、10月の親子音読発表会は休日ということもあり、父親の参加も多数あった。子どもたちの発表会で見せた姿は、ふだんの学校でのものとは少し違い、母親と一緒にだからがんばれた子ども、読み間違えて父親と顔を見合わせて照れる子どもなど、親と一緒にの安心感や満足感が感じられる姿だった。

意欲的に親子音読をすることで「子どもと親が向き合う時間」をつくりだせたこと、家での親子音読でも発表会でもとりわけ父親が楽しんで参加したことは、親子音読という場面の設定に効果があったと考える。

音読練習で一緒に楽しむ、発表会では一緒に緊張するといった気持ちや経験も共有することができたことは、親にとっては、子どものがんばりに気付くきっかけになり、子どもにとっても、親に大事にされていることを実感する機会となった。



**写真1 親子音読発表会**

## イ 絵本『しゅくだい』の読み聞かせから「だっこ」の宿題

親子音読発表会の後、休日参観の機会をとらえ、親子のスキンシップの大切さを描いた絵本『しゅくだい』の読み聞かせに取り組んだ。授業の最後には、主人公と同じように「家の人にだっこをしてもらおう」宿題を出した。

「だっこ」は、子どもが親のぬくもりに触れながら、親の愛情を直接感じ取れるスキンシップ方法の一つである。「だっこ」は、赤ちゃんの頃から繰り返し親子の間で行われてきているが、子どもにとって「だっこ」されることは、最大の安心感と親からの愛情を感じるものである。それにもかかわらず、年齢を重ねていくにつれて、「だっこ」される回数は減り、子どもも「だっこして」というのが恥ずかしいと思うようになってくる。親の方も、日ごろの忙しさと「もう、そんなに手をかけなくても大丈夫だろう」という勝手な思いこみから、次第に「だっこ」が減ってきている現実がある。

今回の取組では、親が授業参観での『しゅくだい』の読み聞かせの意図を汲んで、子どもたちが「だっこして」と言わなくてもだっこをしたり、「大きくなったね」「大好きだよ」と肯定的な声かけをしてくれたりしたようだ。子どもたちは宿題が出た時には、絵本の主人公同様「恥ずかしい」「いやだ」という声をあげていたが、次の日の日記には「だっこしてもらってうれしかった」「またこんな宿題がいい」と久しぶりに親にだっこされた喜びにあふれるものが多かった。

親子音読発表会の親子が一緒に活動する心地よさを感じた後の絵本の読み聞かせで、あたたかい気持ちをそのまま家にもち帰り「だっこ」の宿題に取り組めたこと、親にも一連の流れを理解してもらいながら進められたことの意義は大きい。学校の授業と家庭での課題に連続性をもたせたことで、更に次の学習に対する意欲が高まり、家庭との連携も深まった。

## ウ 生活科「おいしいおにぎりを作ろう」

生活科の授業では、子どもたちは、畑でサツマイモを育て、収穫したサツマイモをみんなに食べてもらいたいと、とりいれ祭りを計画した。サツマイモの料理は、サツマイモご飯のおにぎりと決め、家でおいしい作り方の聞き取りと握る練習をすることにした。それぞれが家で調べて練習してきたことを基に、「おいしいおにぎり作りのひみつ」についてを発表した。

おにぎり作りは、①火や刃物を使わず手だけで作るため、子どもたちにも作りやすい、②ご飯を握るときの感触や形を作り上げていく時の気持ちなどの感想が話しやすい、③力の入れ方やご飯の量を工夫することで形が整いやすく、上達が目に見えるのでやる気が出る、ということからも、家庭で取り組み、「できた」という充実感が得やすい活動である。親には「上手にできたら、その場でほめてあげてほしい」ということを伝え、おにぎり作りを宿題にした。

ワークシートには、家族に「おいしかった」と言われたことを喜ぶ感想が多かった。授業ではそれぞれの家庭の作り方や、おいしく作る秘訣をうれしそうに発表し、家庭でほめられたことで自信をもって授業に臨む子どもたちの姿があった。

その後、とりいれ祭りで作るおにぎりのテーマをグループで考えた。アンケート調査で、親子ふれあい項目が少なかったAのグループでは、「食べるときにこぼれないように、おにぎりをしっかりかたく握りたい」というテーマに決めていた。Aが家でおにぎり作りをした時に書いたワークシートには、母親が「ごはんをこぼしたらもったいない」とコメントがあ

った。Aはそのことを覚えていて、グループのテーマに生かすことができたのだろう。

他の子どもたちも家で体験した楽しさやできるようになった充実感から、学校の授業でも、「おにぎりの塩は、手につけた方が味がはっきりするんだよ」や「おにぎりは『おいしくなあれ』と唱えながら作るとおいしくなるんだよ」というような子どもたちの声から、家庭で聞き取ってきたことに自信を感じとることができた。とりいれ祭りには家の人も招待し、教えてもらったことを生かしながらおにぎりを作った。「おいしい」という親の声に、「また、作りたい」という子どもの意欲的な声が聞かれた。

家庭で学んできたことを学校の活動に生かす喜び、学校で学習したことをとりいれ祭りの場で家の人の前で発表し認められる満足感、また家でおにぎりを作って食べてもらいたいという次の活動に対する意欲を、家庭と学校で連続してもたせ続けることにより、次の活動への意欲を喚起することができると思われる。

## 5 結果と考察

この取組を通して、親が「子どもにかかわってくれる時間」をもち、同じ活動に取り組むことで「気持ちや体験を共有」することができた。この親子の時間を押し付けではなく、一緒に楽しむ時間として設定することで、親から子どもへ自然と肯定的な声かけができたように思う。肯定的な声かけとは、ほめることだけでなく、気持ちや体験を共有することで出てくる「楽しいね」「緊張するね」といった共感の言葉や、「おいしいね」「がんばったね」といった子どもを認める言葉であり、そのような会話や声かけのコミュニケーションや体のふれあいが子どもたちに満足感を与えるということが分かった。

子どもは、親に認められ、一緒に過ごすことに、大きな喜びを感じる。親から愛されているということを実感できることで生きる意欲がわいてくるものである。親も本来、子どものことを大切に思い、愛している。しかし、毎日の忙しさの中で、なかなか子どもが望んでいるようには伝えられないのである。

良好な親子関係とは、まず、子どもが望んでいるように親が受け入れ、親が子どもに肯定的な声かけをしたり、親子で一緒に楽しむことで、認められる喜びや満足感で心が満たされる関係である。それは、一緒に過ごす時間の長さや回数の多さではなく、「質の高い親子の時間」を過ごすことである。質とは子どもとどう向き合って、どうかかわるかであり、それが自己肯定感を高めることにつながると考える。また、親にとっても、子どもと行動を共にすることで、子どものがんばる姿や気付かなかった姿に触れ、一緒にすることの楽しさや喜びを感じるのである。親も子どもも心が満たされた状態で毎日過ごし、良好な親子関係を築くことが「豊かな時間」と言えるのではないだろうか。

そのために、学校は家庭との取り組みの連続性を意識しながらはたらきかけることが大切である。学校の中で見せる子どもの姿を丁寧にとらえながら家庭に返していくことが、『親子の時間』の質を高めることにつながると考える。

## 6 おわりに

この取組を進める中で、各家庭で親が子どもたちにかかわっている姿を見て、「忙しいかもしれないけど、もっと見てやって」から「忙しい中で一生懸命かかわってくれている」と教師の見方が変わった。また、取組の感想を聞いたり、発表会出演をお願いしたことをきっかけに、

それ以外の子どものお話をするなど保護者とも関係を深めることができた。

しかし、一方で、取組を理解してもらえなかったり、忙しくて一緒にやってもらえなかったり、ワークシートに感想をもらえなかったりした子どももいる。今後も学級通信の発行や声かけをしながらはたらきかけていきたい。

2年生の子どもたちは生活科の学習「大きくなったよね」で、自分たちの生まれた時や小さかった時の聞き取りに取り組む。自分たちが愛されて生まれてきたことを聞き、我が子が誕生したときの喜びを語りあう中で、また「親子の豊かな時間」を過ごしてほしいと願っている。

#### 参考・引用文献

- |             |            |                   |            |
|-------------|------------|-------------------|------------|
| (1) 明橋 大二   | (2006)     | 『子育てハッピーアドバイス2』   | 1 万年堂出版.   |
| (2) 家本 芳郎   | (2003)     | 『群読ふたり読み』         | 高文研        |
| (3) 渡辺 あきこ  | (2007 5月号) | 「すくすく食育ノート」『ESSE』 | 扶桑社 p.133. |
| (4) いもと ようこ | (2003)     | 『しゅくだい』           | 岩崎書店       |